

【出原至道ゼミ】 留学生活動報告

Antoine ALTORFFER

I am a fourth-year student from ESIEA in France and I came in Tama University for a four months internship in professor Idehara laboratory.

In France, I am studying computer science, and I am interested in virtual reality and computer graphics. Furthermore, Japan is a country in which I put a lot of interest, where I came three years ago. It was an incredible experience and it made me miss Japan. That's why I did not hesitate when I got the opportunity to work at professor Idehara laboratory. This was a chance to discover Japanese life in a university.

I could share time with Japanese students, thanks to professor Saito who invited us to her lessons. We could share and work with students on video projects, it was fun and interesting. Moreover, it was an occasion to train our Japanese, as we were getting Japanese courses back in France at ESIEA. And even when in difficulties, we always managed to

communicate together.

The university disposed of a lot of infrastructure for everyday life, such as many sport infrastructure or a convenience store for the university... But I enjoyed meal time in the university restaurant. We could eat Japanese meal every day, such as curry, ramen, udon... It was delicious, and all these small elements contributed to the whole immersion in the Japanese culture we were in during these four months at Tama University. The city of Tama was calmer and more immersive than the center of Tokyo while being at 30 minutes by train of the Shinjuku station which let us get everywhere in Tokyo easily.

This was a very good experience, I was immersed in Japanese daily life and culture and I could share with many people during these four months at Tama University, four months I will not forget.

Arnaud PIRIOU

My name is Arnaud, I am a French student currently in fourth year at ESIEA in Paris who had the opportunity to do a four months internship in Virtual Reality laboratory of Professor Idehara in Tama University. This experience was really instructive and brought me a lot of new skills regarding virtual reality and other new technologies in addition to allowing me to learn more about Japanese culture, language and experiment Japanese way of living.

During these four months in Tama University, I had the opportunity to exchange a lot with different professors and students. These cultural exchanges allowed me to discover more deeply Japanese way of living and to widen my mind and my curiosity about Japan.

In France, I could learn the basics about virtual reality. However, I have never had the opportunity to use this technology beyond theory. In the laboratory of Professor Idehara, I could work for four months on my own project which was to make a wingsuit simulator using virtual reality. With the help of professor Idehara, I could successfully build my own simulator and go beyond the difficulties to finally reach my goals and learn a lot of things about virtual reality and about other related technologies.

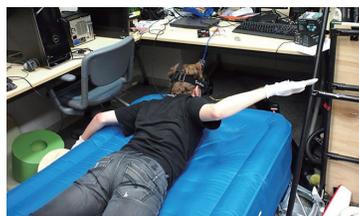
Regarding Japanese language, I could improve my linguistic skills every single day by speaking to other students and teachers. Indeed, I had the opportunity to attend to some Japanese classes with professor Idehara and even attend to some other classes where I could work with Japanese students on different projects as a team.

Beyond the linguistic and cultural aspect, I could get immersed in Japanese everyday life and live in another way for more than four months. Even if I am already studying in France, studying in Tama University made me experience a different way of living and allowed me to see the differences between Japanese and French culture and daily life. From participating to project meetings with other students to the opportunity of making takoyaki, these four months provided me many opportunities to try new things and assimilate Japanese culture and manners.

As I am finishing this internship, I can say that I learnt a lot from this experience and feel more open minded and more than never curious about Japan. Beyond the cultural enrichment, these four months were for me, a source of good memories and nice days in Japan.



ゼミ合宿で工作



ウイングスーツ滑空中



最終発表を終えて

〈木村知義 産業社会特講〉

「デジタル時代のメディア実践」の現場から

ボクのメディア実践 ～誰かの思い出に残る作品になれば～

経営情報学部 3年 廣瀬 大樹

なぜこの「産業社会特講」を受講することになったのか、いま振り返ってみても不思議な感じがする。本当のことを言えば違う授業を履修しようとして他の教室に行ってみた。その授業が終わった後「少人数で面白そうな授業あるよ」と友達と言った。じゃ、ちょっとのぞいてみるかと。

教室に入ると履修者が10人ほどで、私的にはとても良いと思った。先生も私に声をかけてくれてなんとなく居心地のよさそうな雰囲気だ。私はどちらかというと少人数の授業の方が好きだったし、教室での第一印象がとてもよかったので履修することに決めた。「デジタル時代のメディア実践」がどういうことなのかなんてまったく考えずに。

授業が始まって最初は分からないことだらけで、大体、自分たちで映像を作り出すなんてことが想像もできなかった。この授業のことを理解しないまま履修を決めてしまったのだから無理もない。ちょっとしたカン違いで、教室で書く「紙」に何も書かないまま出してしまったら、すぐ先生からメールが来て驚いた。確かに先生とは近い授業なのだ。さらに「みんな、がんばれ!」とか、さかんに先生からメッセージが届く。先生はいつも「リングに上がるのは君たちだ。踏み出せ、動け!」と繰り返し言い続けた。何かをしないとられないという気持ちになるのだった。

いろんな実習があったが、T-Studioに行ってスタジオ体験をしたのが一番印象に残っている。マイクの前に座ってみて、声だけで状況を伝えるのはすごく大変な事だと思った。もちろん初めての経験だった。カメラ撮影では、本格的なカメラを持ち、リアルな体験ができて楽しかった。しかし、楽しいことの前には大変なことがある。いよいよ企画を考えて動画の制作へと進むことになった。

いろいろ考えた末、私は、友人をテーマにすることにした。彼とは中学校が同じだったが特に仲がいいわけでもなく、話す機会もあまりなかった。それが大学に入学してから一緒にいることが多くなった。しかし彼は不思議なところが多く、普段何をしているのか、何を考えているのか、とても気になった。そこで、この企画を思いついた。

「友人の素顔に迫る、面白いね!自分と同じ世代の若者が何を考え、どう生きようとしているのか、そこを描ければ」と先生が言ってくれて自信がわいた。

動画作品を作るには「絵」と音声はどう撮るかが大事になる。そして、それを見る人にどう伝えるかを考えるのがもっと難しい。この難しさを、企画をもとに自分なりの完成図を描き、その一コマコマを動画にしながらか作り上げるというやりかたで乗り越えることにした。いまは編集に取り組んでいる。はじめて行うことばかりなので難しい事がたくさんあるが、頑張っている。

この制作を通して、もっと細かい部分まで学んでみたいと思うようになった。映像を作るのは自分たちみたいに素人でも出来るが、やはりプロの人たちと比べると撮り方から編集の仕方まで全く違うことがわかってきた。プロにはかなわないが、自分が家庭を持ち子供が生まれた時、運動会やなにかの行事でビデオ撮影をすることがあると思う。そんなとき、授業で学んだ事を活かして一生誰かの思い出に残る作品が作れたらいいなと思っている。

難しいこともいっぱいあったが、いまは、完成がどんな感じになるのか楽しみにしている。



T-Studioでモチベーションもアップ! (筆者左)



う〜む、カメラ操作はなかなか難しいぞ!

実りの“季節”(とき)は後からやってきた ～知識ゼロからイベントアワードに応募するまで～

経営情報学部 4年

これは、かつてプロジェクトゼミ「メディア実践論」に在籍した私の「ふり返りの記」である。

「動画を作るにはどうすればいいのだろう…?」

ホームゼミの活動で生まれた疑問であり、どうやって学べばいいかわからず見当がつかなかった。村山貞幸ゼミに所属する私は、広報・WEB班という役割を担ってきた。村山ゼミは、企画したイベントの実施・運営から広報までのすべてを学生が行う。いまの時代、広報はとても重要だ。新聞やテレビなどのメディアに働きかけて取り上げてもらったり、ホームページやSNS等で集客告知を行ったりと、幅広い取り組みが必要になる。メディアに対する理解は必須であり、それがなければ良質なコンテンツを生むのは難しい。こうした気づきから、私は動画制作についてしっかり学ばなければと考えるようになった。しかし、私には2つの「条件」があった。

「単位取得を目的とした講義ではなく、情熱のある教員からしっかりと学べること」

「忙しいゼミ活動と両立することに理解を得られること」

これを満たせなければ、私がめざす学びとホームゼミを両立させることができない。しかし、こんな講義は見つかるはずもないと思った。仕方ない、独学でやってみるかと思った。そんな時、講義一覧を見ていると、動画制作に取り組む「メディア実践論」なるものがあった。もしかすると私の「条件」を満たすことができるかもしれない。そう思った私は、教室に向かった。そこには、私の考えていた以上の環境があった。

教室にいた木村先生は、報道・企画のプロであり、学生に対する情熱が強い。そして毎回、お手製のテキストや資料を使っての講義。本格的な機材やソフトについて学べて使える環境。この3つがあり、やる気さえあれば誰でも動画制作を深く学べると思った。

しかし、恥ずかしいことに、履修中に私のやる気は湧くことがなかった。体調や忙しいゼミ活動、インターンが重なり、日々精一杯で、力のこもった動画制作まで至ることはなかった。

そんな私に、学んだことを活かせる機会が現れた。4年になる直前の3月、就職活動が始まった頃である。ゼミ活動で、JACE イベントアワードというコンテストに必要な動画を作って欲しいとゼミの教授である村山先生から言われたのだ。「メディア実践論」で学んだことを活かす時が来たと来た!と思った。取り組み始めると、まったく行き詰ることなく進んだ。プロジェクトゼミの機材で撮影したイベントの動画素材、講義プリントやビデオで学んだ動画制作の企画・構成と制作手順の知識、これらすべてを発揮できたからである。編集ソフトにもすぐ慣れた。企画・構成はゼミの企画班のコンセプトにもとづいてすすめたが、制作手順を知っていたため、ナレーション等もスムーズに録音することが出来た。木村先生のもとで学んだことが全面に活かしてとても嬉しかった。

イベントアワードでは惜しくも受賞まではいかなかった。しかし、デジタルコンテンツを作る経験が浅いゼミにはとても良い経験になり成長の機会になった。そして、次の年度から、動画コンテンツにも力を入れるという動きも始まった。

小学生も動画投稿する世の中。動画1つくらい誰でも作れると軽くなってしまってもいい。しかし、しっかりとした環境で学ぶ大切さを、いま、私は実感している。



あの時学んだことが今活るとは…



イベント準備も大事に記録(東京ミッドタウン2016.9)

今までの学生生活の中で一番充実した4年間！！

まず初めに、多摩大学に入学できて良かったと思います。なぜなら、この4年間を通して多くの出会いがあったからです。大学だけではなく、地域貢献サークル活動を通して地域の方々とも多くの交流がありました。

多摩大学の授業は少人数制のため教員と学生の距離がとても近いことに魅力を感じます。

1年次は、毎日ネイティブの先生による授業（リーディング・ライティング・スピーキング・リスニング）があり、個人的に一番がよかったのがスピーキングの授業でした。2週間に1度のペースで英語でプレゼンテーションをしなくてはならず毎回苦戦しましたが、その反面英語で考え、クラスメイトの前で発表することで徐々に慣れ、楽しくなってきました。多摩大学の一番の特長である少人数制授業や、分からないことをそのままにせずすぐに教授に聞ける環境は、私にとっても合っていて毎日楽しく授業を受けていました。

念願の英語を英語で学ぶことができ、そこで出会った多くのネイティブの先生方からたくさんの刺激を受け、より英語をスラスラ話せるようになりたいと思いました。そこで、大学2年生の夏から半年間、カナダのバンクーバーへ語学留学することを決めました。英語が大好きだったものの、私にとって初めての留学、初めての海外ということで不安だらけでしたが、国際交流課の方々をサポートしてくださったことで安心してカナダに行くことができました。

カナダに到着してから様々なハプニングがあり戸惑いましたが、それも自分が成長するいい機会！と思うようにしたことで、自分自身かなり強くなったと思います。実際カナダで生活していると「なんて私の英語力は低いのだろう、、、」と、とても悲しい気持ちになると同時に「日本に帰国するまでに絶対に話せるようになる！！」と決心しました。そのために、会話の中で分からない単語や表現はすぐにメモをして日に日に英語が話せるようになりました。

語学学校では、日本をはじめ様々な国の人とコミュニケーションを取ることで異文化を学び、彼らと毎日会話をする中で英語でのコミュニケーション力は確実に伸びました。私は2回別々のホームステイ先に滞在したので様々な経験ができ、語学学校から帰ってきて英語を話さなくてはいけない環境はとても良かったです。両家庭ともギリシャ人だったため、カナダの文化だけでは

グローバルスタディーズ学部 4年 田口 杏

なくギリシャ料理を食べたり、ギリシャ独特の文化に触れることができたのもホームステイをしたからです。毎日英語を使って話せることが何より楽しくとても勉強になり、語学学校で出会った友人とは今でも連絡を取っています。

小学校の頃から夢だった海外で生活することがついに実現し、毎日が本当に楽しくて店員さんと英語で会話するだけでもワクワクしていました。

半年の留学生活は長いようで短く、最後の1ヶ月は日本に帰りたくないと思うくらいバンクーバーが大好きになり、また絶対に戻ってくる！！と決心しました。それくらい住みやすく素晴らしい国でした。留学が終わる頃には以前よりかなりすんなりと英語が耳に入ってきて、英語を話せるようになりました。今までで一番刺激的な体験をした半年間だったと思います。

多摩大学に戻ってからは、授業、サークル活動、そしてゼミ活動に専念しました。私は2年生から地域貢献サークルに所属しています。多摩大学と地域の架け橋のお手伝いをできたらいいな、ということでこのサークルに所属しました。主に多摩大学と藤沢市の方とゴミ拾いをするイベントや藤沢市主催のイベントなどに参加し、大学とは違った楽しさがあり、とても良い経験となっています。

私の所属しているゼミでは多文化共生について学んでいます。今年は主に多摩大学目黒の中高生と共に、多国籍団地として近年話題になっている「いちよう団地」について調査しています。初めてゼミを通して「いちよう団地」のことを知り、地域がその団地があることでどのようにグローバル化しているか、ということ进行调查するのはとても面白いです。

就職活動は無事、第一志望の就職先へ決まったのも、多摩大学へ入学し様々な出会いと経験があり、それらを強みに就職活動へ臨んだからだだと思います。そして、何よりキャリア支援課の方々には最初から最後まで本当にお世話になり、感謝しております。

多摩大学での生活は、日々新しいことばかりで毎回新鮮な気持ちで取り組んだことで、より良い学生生活を送れたと思います。何事も、まずは行動してから！ということ学びました。

これからは社会人として、目標を持って頑張ります！！

最後に、後輩には多摩大学の中だけにとどまらず外に出て、多くの人とコミュニケーションをとることをおすすめします。



ホストマザーと



語学学校のクラスメイトと先生の集合写真

バーベキューパーティ開催

経営情報学部学生会執行部 2年 吉田 京悟

2017年7月15日(土)に学生会主催のバーベキューパーティを行いました。在学生、教職員の皆さんとの交流と、試験前の意気込みを高めることを目的としたこのパーティでは焼肉やドリンクなどを提供し、和気あいあいと楽しい時間となりました。

学生会が用意した企画では、お笑い芸人の\$マネー2\$さんをお招きし、漫才を披露していただきました。そのあとの〇×ゲームの司会なども担当していただき大に盛り上げていただきました。また、留学生送別会も行い、留学生へのプレゼントを\$マネー2\$さんとともに手渡ししました。プレゼントの中身は「和」をテーマとした筆箱にボールペン・手ぬぐい・付箋・菓子を詰めてプレゼントしました。留学生の皆さんには喜んでいただけたようで、こちらも準備した甲斐があったと感じました。フィナーレには彩藤ひろみゼミによるプロジェクションマッピングが構内の建物に映し出され、すばらしい最後を飾ることができました。



\$マネー2\$さんによる漫才



プレゼントを手渡す様子



記念写真



彩藤ゼミによるプロジェクションマッピング

上海東海学院サマースクール歓迎・送別会開催

経営情報学部学生会執行部 2年 渡邊 健史

2017年7月3日(月)から1週間、多摩大学の協定校の一つである上海東海職業技術学院のサマースクールが実施され、7名の学生が来日し、初日のお昼休みに歓迎会を開催しました。杉田文章学部長の挨拶、経営情報学部2年の石田航人君によるダンスパフォーマンス、食事会の時間を設けました。

上海東海職業技術学院の皆さんは日本語があまり分からないとのことでしたので、バトル先生に通訳していただきましたが、日本語で上手に自己紹介をしている留学生もいてとても驚きました。食事の時間には多摩大生と交流も活発に行われたので、とても有意義なものだと感じました。

7日(金)の送別会では、本学の学生から留学生にプレゼントを渡したり、ペッパー君と写真を撮ったり賑やかに過ごしました。歓迎会、送別会ともに、先陣を切って留学生に話しかけてくれた1年生には本当に感謝しています！次回の留学生関係のイベントは1年生が主担当になりますのご期待ください。



日本語クラスで勉強中



浴衣体験



送別会 集合写真



送別会 プレゼント贈呈

経営情報学部学生会所属学生団体(サークル)紹介

音楽連合

代表：経営情報学部 2年 新館 諒

サークル員同士でバンドを組み、練習やライブ演奏等を行うサークルです。

日々のサークル活動以外でも、先輩や後輩関係なく食事や遊びに行くことも多いとても仲の良いサークルです。

大学に入学してから初めて自分の楽器を買って始めたという人も少なくないので、今から楽器を始めるのも全く遅くありません。

みんなで楽しく大学生活を送りましょう。



ゆるく格闘技

代表：経営情報学部 3年 小熊 祐希

格闘技って上下関係厳しくて怖い・痛ってイメージが強いんですよね？私たちも厳しいの・痛いのが嫌です。楽しくゆるく格闘技がしたい！そう思って作ったのがこのサークル！ゆるく格闘技。略して「ゆるかく」。

空手・キックボクシング・護身術をメインにやっています！簡単にできる身をまもる方法教えちゃいます！

見るだけでも歓迎！格闘技についてしゃべりたいだけでも大歓迎です！

